

「雨音の森」

シャーリー・ヤン

昔から、父は私をよく家の近くにある森に連れて行ってくれた。私の記憶の中、あの頃の山林はよく雨が降った。父はそういう天気が好きだった。子供にとって歩きにくすぎた泥まみれの地面から私を持ち上げて、父は背中に乗らせてくれた。チビな私は彼の肩越しにある景色を見て初めて、自分のことがなんという小さい存在かと実感した。

森で遊んだある日に、一つの事故があった。雨が止んだ後父と森で冒険した時、私は父を追いかけて足元に注意しなかったせいで、濡れた石の上を踏んで滑った。折った枝が私の右眉毛のところを切った。まだ幼い頃だったから、あまり詳しく覚えていないが、ぼんやりと父の心配な声と苦しんだ顔、そして血の匂いが記憶に残っていた。今も右眉毛に眉毛が生えない傷がある。その件について、父はずっと心残りがあったようだ。私の傷を見た時、父はよく後ろめたい表情をしていた。

父は自然が大好きだった、特に自然の音。例えば、小鳥の鳴き声や、川の流れ音や、木の葉を動かす風の音など。父が一番好きだったのは、雨の音だった。

「紗良、こっちおいで。」と父は私に呼びかけて、私達はよく木の根に座って、森から流れてきた優しく、静かな音を聞いた。

しかし、もう三十年も経って、今仕事で忙しくて、その森にほとんど行ってなかった。近年、年を取ったせいか、アルツハイマーの症状が現れた後、父の聴力も段々悪くなった。最初はただ他人の話し声あまり聞こえないが、後で急に重症化して、大きい声や音しか聞こえなくなった。父は段々話さなくなり、あまり家を出ないようになった。医者から補聴器が必要だと勧められて、すぐ父に用意したところ、父が誰にも言わずに家を出た。

仕事中に母から父のことを聞いた。雨雲が発生して、行方不明な父を心配して、私は急いでオフィスを出た。車で家への帰り道、何かの感だったかもしれない、どこに行くべきか分かってきた。

あの森に着いた時はもう暗くなっていた。私は慌てて森に入って、父を探し始めた。長くはかからなかった。漸く森の奥で父の姿を見つけた。

私が尋ねる前に、父が話し始めた。

「突然紗良の声が聞こえた気がした。紗良が驚いて叫んだ声のように聞こえた。又滑ったかと思って、探しに来たんだ。」

雨が降り始めた。私は何も言わずに父を抱きしめた。

「雨か。」父は呟いた。「でも、音がしないね。」

その瞬間、私は自分の心の雨が降り出したのをはっきりと聞こえた。